

〈研究ノート〉

ESD に関する文献分析

— 雑誌記事を中心に —

柿岡 玲子 (安田女子短期大学)

本研究の目的は、多様な形態が見られる ESD¹⁾研究の特徴を文献分析から量的に明らかにする²⁾ことである。2002 年、日本はいち早く ESD という考え方を「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で提唱した。そして、同年国連総会で国際的枠組み「国連持続可能な開発のための教育の 10 年(2005-2014)」が採択された。このような世界状況の中、ESD 及び持続可能な社会に関する論文及び図書等が発表され始めたのは 2004 年以降であった。更に、先述した「持続可能な開発のための教育の 10 年」の最終年度が 2014 年であったことから、2014-15 年の文献等が全体の 30%を占めていることが文献分析を行う中で確認できた。

キーワード：ESD, 雑誌記事, 文献分析

はじめに

現在、人類が永遠に存続できるかどうかという地球規模での危機に直面している。科学の発達、人間と自然とのバランスを崩壊し、人類が永続的に存続できるかという難題をもたらした。このような状況の中、2002 年 12 月のヨハネスブルグ・サミットにおいて、2005 年から 2014 年までの 10 年間で「国連持続可能な開発のための教育の 10 年-UNDESD-(United Nations Decade of Education for Sustainable Development)」とすることが決議された。更に、2013 年第 37 回ユネスコ総会で「持続可能な開発のための教育に関するグローバル・アクションプログラム(GAP)」が採択されたことに基づき、ユネスコを主導機関として ESD は国際的に取り組まれた。

そこで、本研究では「ESD」について、いつから、誰(どの機関)が、どのような取り組みをしていたかについて、NDL-OPAC(国立国会図書館蔵書検索システム)を使用し、タイトル中に「ESD」を含む図書及び記事について検索し、何らかの傾向や見通しを文献調査の結果から読み取ることが目的として研究を進めた(表 1 参照)。本研究において「ESD」をタイトルに含む文献を多様な角度から分析することで、研究動向や研究対象が多岐にわたることが確認できたことは本研究の成果と考えられる。多くの文献を量的に分析することにより、研究の端緒をみつけ、研究が多様な方向に広がったり深まったりする過程を把握することができるとともに、ESD 研究の状況を量的に捉えるものとして文献分析は有用であると考えられる。

表 1 「ESD」をタイトルに含む図書・記事一覧 (最新 10 件のみ表示)

図書	吉田教彦	世界が変わる学び =Learning to Transform the World: ホリスティック／	ミネルヴァ書房		272p	2020.04.
記事	山口 伸	沿岸域廃棄物を対象としたESD(持続可能な開発のための教育)の実施.	マリンエンジニアリング： 55(2)	図巻頭		2020.03.
記事	東京都江	わたしの教育実践(329)子どもの学びを深めるESDの学校	教育展望 / 教育調査研	66(2)	60-67	2020.03.
記事	清野 未恵	SDGsを切り口としたサービスマーケティングの可能性：神戸大学ESDコースの	ふくしと教育 / 日本福祉	(28)	12-15	2020.02.
記事	薄羽 美江	2020年 これまでの日本・これからの日本 令和二年の「将来」を考える：持	月刊カレント	57(2)	58-61	2020.02.
記事	河本 大地	ESDでみるへき地教育の在り方	日本教育大学協会研究	38	91-103	2020
記事	御手洗 洋	ESDの視点からみた食農教育活動：神奈川県厚木市「夢未Kidsスクー	環境情報科学	49(1)	120-125	2020
記事		特集 ESDで持続可能な社会の担い手育成：第34回時事通信社「教育奨	内外教育	(6795)	12-13	2019.12.10
記事		特集ESDで持続可能な社会の担い手育成：第34回時事通信社「教育奨励	内外教育	(6795)	12-13	2019.12.10
図書	田中治彦,	SDGsカリキュラムの創造	学文社		203p	2019.12.

I ESD 研究の現状(データから)

ESD 研究に関する収集した 825 件の文献等を「表 1」に示したデータ表から、「文献件数の推移」「文献の種類」「ESD を表題に含む教科件数」「校種別の ESD 件数」に分類した(詳細については「注 2」参照)。ESD 研究に関する論文等は検索の仕方では件数が大きく異なると思われる。本研究においては、我が国における ESD 研

究の流れや現状について NDL-OPAC を使用し、分類分析を行うことで、量的に把握できると考えた。

本研究で使用したデータに関しては、「ESD」を含む 825 件の文献を、図書・記事・報告に分類、著者名、タイトル、出版社及び掲載誌/報告書名、巻数・頁数、発行年の順に文献一覧表を作成し、その後タイトルから文献分析を行った。結果を以下に示す。

(1) ESD に関する文献件数の推移

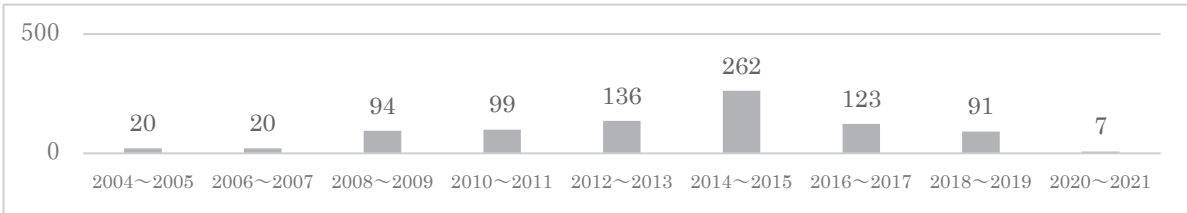


図 1 文献件数の推移

総文献数は 825 件であった。図 1 には「文献件数」がどのように推移していったかを 2 年ごとにまとめて示した。詳細に見ていくと ESD 研究が緒に就いた 2004-2005 年の文献数は 20 件であった。内訳として 2004 年の文献数は 5 件であったが、2005 年には 15 件へと文献数が増加していた。UNDESD 最終年度前後の 2012-2015 年において論文数が飛躍的に増加し、全体の 46.7% を占めている³⁾。

(2) ESD に関する文献の分類



図 2 ESD に関する文献分類

図 2 から分かるように、記事(論文)が中心で全文献の 76.5% を占めている。記事は、学会誌・大学の論文集や紀要・教育関係の新聞や週刊及び月刊誌等に掲載されていた。報告に関しては、文部科学省や環境省など省庁関係の報告及び学会等での報告が見受けられる。日本社会教育学会編『日本の社会教育』(2015.9)に「ESD」を表題に含む 22 件の論文が一举に掲載されていた。同誌の中には、例えば笹井宏益・佐藤一子「ESD 推進に向けた大学と地域の連携・協同:地域作りの担い手養成の視点から」や中川恵理「園児に向けた「脱温暖化教育」の社会的波及効果と ESD」等、一般から幼児までを視野に入れた ESD 研究が行われていることがわかる。

科研・AV(DVD)に関してはそれぞれ 1 件であるが、ESD が含まれることが文献収集の条件であり、内容は ESD であっても表題に ESD が明記されていない場合は調査対象から除外したため、科研の件数が 1 件しかなかったのではないかと推測する。また、ここで提示している科研は、2004-2007 年度の研究であり、2008 年に発表されたものである⁴⁾。AV(DVD)に関しても、「環境」という言葉がタイトルに含まれる AV は多数存在しているといえるが、ESD と標記されている AV は 1 件⁵⁾であった。

(3) ESD を含む教科件数

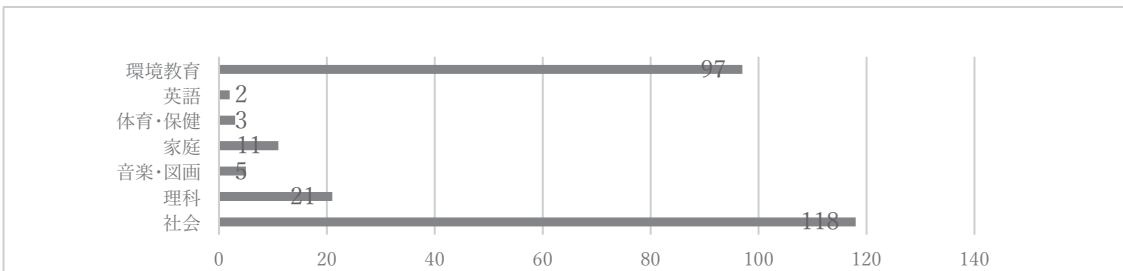


図 3 ESD を含む教科別分類

本分析には教科ではないが、「環境教育」を表題に入れている文献を図3に含め込んだ。これに関しては『環境教育指導資料』⁶⁾が国立教育政策研究所教育課程研究センターから中学校と幼稚園・小学校向けに発行されているように、理科・生活・社会・総合学習などの授業時間内に実施されていると考えられるので、教科として分類に入れた。また、「環境教育」は97件と全体の11%を占めていた。教科においては、「社会」が多く見受けられる。内訳としては、雑誌記事：96、報告：2、図書：20であった。ただ、分析方法によっては「社会」から外れる内容があると思われるので、今後も引き続き内容の精査を行ってきたい。

小学校においては、松葉口玲子「生活科・総合的学習の時間と環境教育・ESDとの関連：持続可能な消費との関わりで」（「横浜国立大学教育人間科学部紀要 第15巻」97-106頁 2013.2）など、ESDを一教科ではなく総合的に捉え合科的に教育実践を考察する試みも見られる。また、芸術科目としての音楽と図画(美術)では、音楽に4件、図画(美術)では、宮 敏明「ESDの視点から見た造形教育の実践：東日本大震災で被災した宮野森小学校の場合」（「日本美術教育論集 51号」181-188頁 2018）の1件が掲載されている。教科の中で文献が見当たらなかったのは、国語と算数の2教科であった。

(4) 校種別 ESD 件数

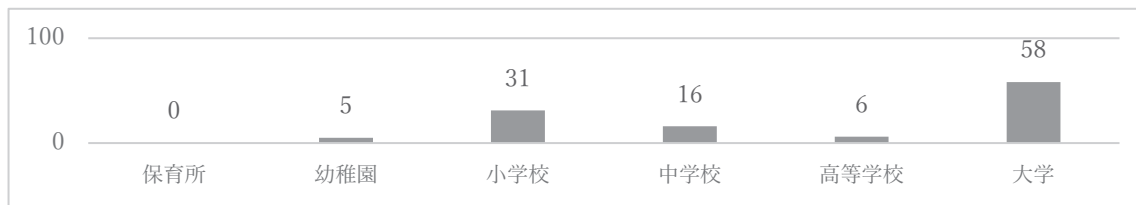


図4 ESDに関する文献等の校種別分類

文献に関して、これまでも述べてきたように本研究では文献分析を焦点化しているので、ここに表示している以外でもそれぞれの校種に含まれる文献もあると考える。幼稚園・保育所に関しては、「幼稚園」と表題に明示してある文献は5件であるが「保育所」及び「幼稚園・保育所」と表題に明示してある文献は見当たらなかった。「幼稚園・小学校」と提示してある文献は2件⁷⁾あった。また、「乳幼児」「保育」「保育観」「保育内容」「領域」等と表記されている文献は9件あったが、校種が明示されていないため校種別件数に含めてはいない。

全文献数からするとここに挙げた件数は、全体の17%にしか過ぎない。これは、題目から選別した結果であるが、上述したように内容を精査することで校種別件数は増加するであろう。更に、大学のテキストとして出版されたと推察できる文献も散見されることから、大学の件数が増加する可能性も考えられ、タイトルによる文献分析の限界がここにあると考える。

(5) その他

外国に関するESD研究は、17カ国43件の文献があり、中でもドイツに関しては14件の文献等があった。その他で複数の文献等があるのは、イギリス(英国)が6件、スウェーデン・オーストラリアが各々3件、フランス・ネパールが各々2件、オランダ・インド・ラオス・台湾・スリランカ・インドネシア・メキシコ・アメリカが各々1件であった。国内では、東京・岡山の10件を筆頭に、1道1都2府25県のESD関連の文献等が見受けられた。

II おわりにかえて

21世紀に入って開始したESD研究は、図書・記事についてみるとすでにピークを過ぎ、件数は下降気味であり、報告のみ増加傾向にあることが分かった。最近ではESDからSDGs⁸⁾という表記・表現に切り替わっており、ESDを包摂する概念としてSDGsが研究され始めている。しかし、2019年ニューヨークで開催された第74回国連総会において、ESDはSDGsの17全ての目標の実現に寄与するものであることが「グローバルな課題：気候と環境、持続可能な開発、貧困削減と不平等との戦い、教育、移民」で確認されている。即ち、持続可能な社会を持続可能な社会へ転換していくためには、ESDの学びは欠かすことができないといえる。

我が国の教育においては、改訂された「幼稚園教育要領」(2017.3)「小・中学校学習指導要領」(2017.3)「高等学

校学習指導要領」(2018.3)の前文または総則において「持続可能な社会の創り手」の育成が明記⁹⁾されていることから、持続可能な社会を実現していくことを目指し、各人が自らの問題として主体的に捉え、取り組む学習・教育活動の実践が望まれる。そこで、今後は、文献分析の結果を踏まえ、文献等の内容の精査を進めると共にESD研究及び実践を深化発展させることが課題である。

謝辞

本研究は、未来教育研究所代表 中島正明先生(安田女子大学名誉教授)にご指導頂き、文献収集・分析を行いました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

注

- 1) ESD : Education for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育)
1983年「環境と開発に関する世界委員会」(国連ブルントラント委員会)の報告書において“Sustainable Development”という言葉が始めて明示された。
- 2) 文献調査は、NDL-OPAC(国立国会図書館蔵書検索システム)を使用し、2020年5月18日、タイトル中に「ESD」を含む図書及び記事について検索した。合計852件の文献は、マイクロソフト・エクセルで一覧を作成した。サブタイトルの「雑誌記事」は、主として「研究論文」が中心であり、掲載された書籍も紀要や学会誌が多く見られたが、月刊の教育雑誌等に掲載されたものも一定数あったので、「雑誌記事」と標記した。本研究はNDL-OPACを使用し国立国会図書館に収録されている文献のみを対象としたが、検索方法は多様であり、それによって文献の総数は大きく異なることを付記しておきたい。
- 3)2012年から2015年までの各年の文献数は、2012年：74件(8.6%)、2013年：62件(7.3%)、2014年：142件(16.7%)、2015年：120件(14.1%)であり、最終年度の2014年が文献総数において一番多くなっている。
- 4)科研：安部 治「持続可能な開発のための教育(ESD)に関する総合的研究」(2004-2007)
- 5)DVD：環境パートナーシップ会「令和元年度 環境教育・学習拠点における「ESD 推進」のための実践拠点」(2019.9)
- 6)国立教育政策研究所 教育課程研究センター発行の『環境教育指導資料』には、幼稚園・小学校編と中学校編がある。『環境教育指導資料 中学校編』(H28.12)『環境教育指導資料 幼稚園・小学校編』(H26.10)
- 7)佐藤隆他「幼小における自然体験を重視した環境教育と ESD の推進に関する考察：全国幼稚園・小学校への質問紙調査を通して」『生物教育 54(1)』2013.2 16-26 頁
浅岡幸彦他「座談会 幼稚園・小学校における環境教育の展開と ESD の動向」『初等教育資料 911』2014.3 36-43 頁
- 8)2015年の国連サミットにおいては、先進国を含む国際社会全体の目標として「持続可能な開発目標(SDGs : Sustainable Development Goals)」が採択された。SDGsは、「誰一人取り残さない社会の実現」を目指して、2030年を期限とする包括的な17の目標及び169のターゲットにより構成されている。
- 9)「幼稚園教育要領」における ESD に関する文言
前文「これからの幼稚園には、学校教育の始まりとして、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、…(略)…、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる。」フレーベル館 3頁 2017
「小学校学習指導要領」における ESD に関する文言
前文「これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、…(略)…、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」東洋館出版社 2頁 2017 (下線：筆者)

Literature Analysis on ESD
－Focusing on Magazine Articles－

Reiko KAKIOKA (Yasuda Women's College)

Abstract

The purpose of this study is to quantitatively clarify the characteristics of ESD studies, which have various forms, from literature analysis. In 2002, Japan was one of the first to advocate the idea of ESD at the “World Summit on Sustainable Development”. In the same year, the United Nations General Assembly adopted the international framework “UN Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014)”. In such a global situation, it was not until 2004 that papers and books on ESD and sustainable society began to be published. In this research, we used NDL-OPAC (National Diet Library Collection Search System) to find out who (which institution) was working on “ESD” from when, and included “ESD” in the title. We searched for books and articles, and proceeded with research with the aim of reading some trends and prospects from the results of literature searches. In addition, since the final year of the aforementioned “Decade of Education for Sustainable Development” was 2014, it is a literature analysis that the literature in 2014-15 accounts for 30% of the total. I was able to confirm it while doing. In other words, it is considered to be the result of this research that we were able to confirm that the research trends and research subjects are diverse by analyzing the literature containing “ESD” in the title from various angles.

Keywords: ESD, magazine articles, literature analysis